

# 中国語における発音教育と古典の解釈

—李白『客中作』と『山中与幽人对酌』を題材として—

秦 耕 司

〇・〇 中国語学習の帰着点は音読、朗読にある。従って、中国の古典を正しく解釈するには、日頃よりしっかりした発音練習を積んでおくのも重要な要素となる。これは筆者が長年中国語に親しんできて、最近ようやく多少なりとも実感を持てるようになってきたことである。この点について『唐詩選』などで我々日本人にも古くから親しまれている有名な李白の詩二首『客中作（行）』（以下『客中作』に統一）と『山中与幽人对酌』によって見ることにしよう。前者は文法面における解釈のあやまち、後者は中国的発想の比喩を見落としているために、いずれも詩全体の解釈がスッキリとしていない例である。もちろん文法や比喩の問題を安易に発音問題に結びつけるのは危険かも知れない。実際筆者は、今の時点で両者間の関係を論ずるような理論的準備は、正直言って何もない。ただ、言語は一義的には音声言語であり、意味は音声に宿っている、という点がひとつ。そして言語の意味は、単に個々の単語の意味を寄せ集めたものではなく、形態素の基本義から始まって、単語と単語の結びつき、文と文の結びつきから意味が生じること、つまり文の意味は音声の流れの中にあることがひとつ。この二点が発音と文章の意味読解を結び付ける糸口になるのではないか。そう思われるのである。とすれば、発音練習は、単に正しい発音を習得するための発音教育ではなく、意味との関わりにおける音声教育をもっと重視してもいいのではないか。そのような考えも、そろそろどこからか聞こえてきてもよさそうなものである。少なくとも筆者はそう思っている一人である。そんなわけで小論は、あくまで筆者自身の体験からくる直感

を、思いつくままに素描したに過ぎないことを、最初にことわっておく。

0・1 おそらく大方の読者は、この二首の通説について釈然としないものを感じておられるであろう。いかに豪放な李白とは言え、自分をもてなしてくれている初対面の主人に向かって、酒をもっとご馳走しろと言ったり、話し相手の庵で楽しく酒を飲んでいる当の相手に、おれは酔っぱらって眠くなったからお前はひとまず帰って、その気があるなら明日また琴を持って来い、などと言うであろうか。そのような解釈からは、豪放さよりも、相手に対して非礼この上ない、傲慢さや身勝手さをこそ感じるのである。このような解釈が生まれたのは、前者『客中作』には、文法的に見落とされている中国語の本質とも言うべき重要な点があり、後者『山中与幽人对酌』では、その場の状況に応じて臨機応変に、即興的に表現する中国語的比喩が見落されたことによる。この二点は、現代中国語および現代中国人の発想にも共通するもので、古典の解釈においても、現代語の学習がいかに大切で有効であるかを証左するものと言ってよい。題材にこの二首を選んだ所以である。

1・0 はじめに文法面の問題から見ることにしよう。李白『客中作』の通説は次の通りである。

蘭陵美酒鬱金香 蘭陵の美酒 鬱金香  
玉椀盛来琥珀光 玉椀に盛り来たる 琥珀の光  
但使主人能醉客 但だ主人をして 能く客を酔はしむれば  
不知何処是他郷 知らず 何れの処か是れ 他郷

【通釈】蘭陵の地でできる美酒、鬱金香。玉杯いっぱい注げば琥珀色の光を放っている。ただこの酒宴の主人が、旅の客たる私を十分に酔わすことさえできれば、なに、どこが知らぬ他郷などと思うものか。

(松浦友久編『校注・唐詩解釈辞典』大修館書店)

まず問題となるのは“使”を用いた使役文である。“使”使役文は、古

代語より普通次のように説明されている。

動作をさせる者      動作をさせられる者   動詞・動詞句

主語 + 使 + 目的語 ——

読み 主語 [目的語] をして—しむ

意味 主語は [目的語] に——させる<sup>1)</sup>

つまり“使”の前は主動者、後は受動者である。これを図式化すれば次のようになる。

主動者 + “使” + 受動者 + 動詞

この図式は現代語においても変わらない。

这句话使他生气      この一言が彼を怒らせた。

もちろん唐詩においても同じである。

花月使人迷      花月人をして迷わしむ（李白『襄陽曲』其一）

とすれば“使”の直後にある“主人”が受動者であることは誰の眼から見ても明らかであろう。決して主動者ではない。だから「主人が客を酔わせる」という解釈は成り立たないのである。ではなぜこのような間違いが生じたのだろうか。原因は二点ある。

1・2 一般常識として、主人が客をもてなすという社会通念がある。実際本詩には主人が客に酒を振る舞っているという背景がある。それが一句から三句までである。その三句が問題の“使”使役文である。上の図式からも解るように、受動者はその後の動詞の主語になるが、この三句ではその動詞“酔”がさらに目的語“客”を伴っている。だからここでは“主人”が“酔”するのではなく、“主人”が“客”を“酔”させる意味になる。つまり“主人能酔客”は意味的使役文である。それでこの意味的使役文の使役と“使”によって表されている使役の意味とを混同し、“使”使

役文の主動者と受動者を確認しなかったものと思われる。これが第一の原因である。

1・3 本詩については文法的に今一つ見落とされている点がある。三句と四句の意味関係である。“主人”が受動者であることはすでに見た通りである。では“主人”を受動者とする主動者は何か。それは“使”の前にある語であるから“琥珀”色に輝く“蘭陵”の“美酒”“鬱金香”である。だから三句は「鬱金香が主人をして能く客を酔はせしむ」と言う意味である。つまり客を酔わせるのは、主人ではなく鬱金香である。しかし問題はこの三句だけにあるのではない。この三句を四句との関連で見た場合、「鬱金香が主人をして能く客を酔はせしめば」と条件句とすることに問題があるのである。それは先ず常識的に見て無理があろう。李白は客の立場であり主人とは初対面である。だから、このような解釈は李白に「鬱金香が、うわさ通り本当に客である自分を十分に酔わせてくれるならば」と、疑いを抱かせるか、要求がましいことになり、主人に対して明らかに礼を失することになるからである。事実はその逆である。

わずか四行の詩において、その半分に当る二行全てが酒の描写であり、かつ“美酒”と言ひ、“琥珀光”と言っていることから明らかなように、李白は主人がこの酒を振る舞ってくれたことに、全身を震わせて喜んでいるのである。眼前で玉椀に注がれる美酒。それがなみなみとつがれば琥珀色に輝くではないか。李白の視線は玉椀に釘づけになって動かない。李白はその美しく光る酒を見ただけで、喜びは満腔に溢れ、美酒をまだ口にする前からすでに酔ったような気分になっているのである。酒に眼のない李白。それでこそいかにも小さなことには囚われない、豪放で率直な李白らしい反応と言えるであろう。決してこの酒が「本当にうわさ通りに美味しければ」などと、主人を前にしてまわりくどくてケチ臭いことを言っているのでもなければ、「主人が私を十分に酔わせてくれれば」と要求がましいことを言っているのでもない。この点に関しては、中国語の複文における意味関係という語学的側面より明らかにしておく必要がある。

2・0 中国語にももちろん他の言語同様、因果関係とか逆接関係といった、複文における意味関係を表す接続詞や、接続機能を持った副詞はある。しかし周知の通り、中国語では実際にはこのような語を用いないことが多い。よく引き合いに出される例<sup>2)</sup>を挙げてみよう。

他来，我去。

二つの主述句を単にコンマによってつなげただけの複文であるが、この文は次の四通りの解釈が可能である。

1. かれが来るから、わたしは行く。(因果関係)
2. かれは来るが、わたしは行く。(逆接関係)
3. かれが来るなら、わたしは行く。(条件関係)
4. かれが来ても、わたしは行く。(譲歩関係)

この例からも明らかなように、四種ある意味関係の内、該当するのがどれであるかを見分けるのに、その手がかりとなる外部形式はなにもない。この文がどのような言語環境の中で用いられているのか、具体的な文脈の中において初めて明かになるのである。中国語が文脈依存型の言語であると言われる所以である。これは中国語の本質とも言うべき特徴であり、教育現場における最大のポイントと言っても過言ではない。実際このような例は、会話文ややさしい口語文に多く、初級教科書にも少なくない。しかしなぜかそれを説明する教科書はない。初めのうちは、日本語の訳文にはそのような関係を表す接続詞など不要な例や、あってもせいぜい因果関係の複文が多いので、学生が無意識のうちに正しく訳しているからだろうか。しかし前後の意味関係がうまくとれないからか、その意味関係を表す語句がないからなのか、訳す時に立ち止まっている学生も決して少なくはないのである。教壇に立った当初より、初級、中級、上級を問わず、中国語学習上の重点注意事項として、筆者が一貫して最も強調している点の一つである。

2. 1 “使”を始め“令、教、遣”など使役を表す語は、確かに“縦使、仮令、若教、若遣”のように、仮定もしくは条件の従文に用いられることが多い。しかしそれはあくまで単独で仮定条件を表す“縦、仮、若”とともに用いられているからであって、語自体に仮定の意味を持たない“但”<sup>3)</sup>との併用は、必ずしも仮定用法に限定されるものではない。“使”使役文は過去の事柄に用いられることも珍しくはないし、“但”も最終句に用いられることから明らかなように、決して“但”自身が条件句を造る機能を持っているわけではないのである。それでは条件句を条件句足らしめている条件とは何か。因果関係との比較で見よう。

現代中国語では仮定関係も因果関係も、ともに副詞“就”が用いられる。と言うことは、中国人の思惟法ではこの二種の意味関係のその根底に、両者に共通するもっと根本的な意味を見出しているのである。その共通点とは何か。

如果他不同意，那就算了。

もし彼が同意しないならやめよう（仮定関係）

因为临时有事，就在中国待了一周。

急用ができたので中国に一週間滞在した（因果関係）

上記の例文はいずれもAという原因に対するBという結論もしくは結果という基本的な関係がある。そして仮定とは、原因を仮定して結論を出しているもの、因果とは、すでに原因があつてそれに伴う結果が出ているものである。つまり両者の違いは時点の違いによる<sup>4)</sup>と言えよう。時点の違いには、原因が仮定で結論が出ているもの、原因が確定して結論が出ているもの、原因があつて結果が出ているものなど、いくつかの段階がある。

日本語においても、原因が確定し結論がでていれば、たとえ未来のことであっても因果表現をとる。

台風が来るならピクニックは中止だ（仮定関係、条件関係）

台風が来るのでピクニックは中止になった（因果関係）

本詩では酒はすでに出されて李白の眼前にあるから原因は確定している。しかし李白はまだ酒を飲んでいないから酔ってはいない。とは言え、“酔”は身体の状態を述べるだけでなく心理状態をも述べる。そしてそれを受ける四句は、動詞が知覚動詞（“知”）であって、動作行為を表す動詞ではない。それが時点による結果云々を不明確にしている原因となっている。三句と四句だけに焦点を合せれば、仮定の条件句とすることに何ら支障はないのである。

2. 2 ここで結論を述べることにしよう。“但”はその後の語句で示されるものを制限する。だから原因仮定の条件句に用いられれば「ただ～ならば」と条件を制限するが、現にその状況が実現していれば原因確定の条件句になるから“只管”（ひたすら）の意味となる。“但”は上述のように、それ自体が条件句を造る機能を具えているのではないからである。従って本詩ではすでに美酒が目の前にだされているから、三句と四句の意味関係は、「もしただ～ならば」と言う仮定の条件関係ではない。「このようにただひたすら～して下さるので」と言う因果関係か、少なくとも「このようにただ～して下さるならば」と言う原因確定の条件関係である。“能”が“没”で否定されることから明らかなように、“能”は必ずしも未然表現を保証するものではないのである。つまり本詩における“能”は、美酒を振る舞ってくれたことに対して用いられているのであって、振舞ってくれば、とこれから先のことに対して用いられているのではない。だから本句は「(美酒がこのように) ひたすら主人をしてよく客を酔わせるので／酔わせるなら、私はここが異郷であることなどすっかり忘れてしまいました／忘れてしまいます」という意味である。

もちろんこの美酒を振る舞っているのは主人である。ところが客に働きかける主動者を直接主人とするのではなく、美酒が主人に働きかけて客を

酔わずと表現したところに、李白一流の心憎いばかりの演出があった。これがあのうわさに聞こえた蘭陵の美酒、鬱金香ですか。なんと見事な輝きでしょう。かたじけない。こうしてこの琥珀色の輝きを眺めていると、それだけでもう十分酔った気分になってしまいます。私にはこれ以上のご馳走はありません。ここが見知らぬ土地だなんて、全く忘れてしまいます。李白はそう言いたいのだ。蘭陵の美酒鬱金香が主人の顔を立てたのである。

琥珀色に輝く蘭陵の美酒鬱金香。それを見ただけでもう李白は酔った気分になっている。酒席に料理はつきものである。酒が名だたる蘭陵の美酒であってみれば、料理もそれに相応しい山海の珍味であろう。ところが李白は、どんなご馳走が眼前に並べられていても、そんなものは眼に入っていない。眼中にあるのは琥珀色に輝く蘭陵酒のみ。この一首は「この酒があれば、それだけでもう十分どんな料理にも勝るご馳走です」と言う蘭陵の美酒への最高の賛辞であり、それを出してもてなしてくれた主人への最大の謝辞なのである。このように解釈してこそ、四行詩でその半分に当たる二行を費やして、酒をあれこれと描写した意味が生きてくるし、それを受けて蘭陵の美酒を一段と際立たせている“但”の字が、詩全体の中で輝いてくると言えよう。美酒を振る舞ってくれた本来の主動者である主人を受動者とし、蘭陵の美酒を主動者として主人に働きかける表現とした着眼は、異彩を放っている。

3・0 さて、仮定関係か因果関係かの違いは、原因が確定しているか否か、という時点の違いであった。しかし上述の例文からも解るように、実際には原因が仮定か確定か、その時点を明確に表す言葉が用いられていない文も珍しくない。複文の意味関係を表すものに、接続詞や一部の副詞以外にどのような外部形式があるのか、現時点では十分に解明されているとは言えない<sup>5)</sup>。その上複文における実際の意味関係は、複雑多岐にわたっており、中国語はまだまだ文脈依存型の言語と言わざるを得ないであろう。

このような特徴を持つ中国語を正しく理解する能力を養うためには、あ



る文の意味を正しく理解した後で、その文を繰り返し繰り返し音読し、日頃より語感を磨いておくしか方法はない。少なくとも、音読は語感を養うための極めて有効な手段と言ってよい。“书读百遍其意自现”〈読書百遍意自ずから通ず〉とは、文法研究が未開な時代に、実践によって体得した先人たちの体験から生れた格言であるが、これは文法研究が進んだ今日なお通じる実用の金言でもあった。最近の中国語の授業は、文法説明が不必要に詳しくなり、その分音読が軽視される傾向にあるのではないだろうか。

3・1 外国語学習の基本は音読にある。音読をぬきにした学習や教育は、知識偏重の受験勉強と何ら変わるところはない。文法（学校文法）はあくまで文理解の基礎知識であって、語義とともに学習の一次手段である。

発音練習と言えば、常識的には中国人の発音を目標に正しい発音を習得することが目的である。しかしそれはあくまで形式としての発音に止まるものである。真の発音練習とは、単に声調や無気音、有気音など、形式に注意して発音することだけではない。それは基本的な最低の達成目標に過ぎぬ。それからさらに一步進めた強弱や抑揚、ポーズの取り方等、意味内容やニュアンスを考えながらする味読、音読もちろん大切である。それは他の言語を含めて、音読の最終目標になるであろう。ところが中国語の場合、その前に、あるいはそれと並行して、語と語の結び付き、句と句の結びつきを考えながらの音読がある。そのような発音練習こそ、中国語の感覚が体内にジワジワと浸透してくる、読解力向上につながる音読方法なのである。

3・2 “他来，我去”は、これだけを取り上げた場合、両者の意味関係は言わばニュートラルであって、そこには何ら意味上の関係は生じない。この言葉を発する具体的な言語環境の中に置かれて始めて両者間に意味関係が生じるのである。しかもその意味関係の決め手となる語句は、明瞭な形では存在しない場合が多い。長年中国語に親しんでいる者でさえ「カン」に頼らざるを得ない状況はここにある。

語順が文法関係を決める中国語は、語と語、句と句の組み合わせが重要で

ある。主語、動詞、目的語、修飾語と言った要素はその位置が固定されているが、その内部の意味関係は比較的自由に、多様性に富んでいるからである。“吃饭”は「ご飯を食べる」であるが、“吃食堂”は「食堂を食べる」ではない。“我吃了”は“我”が“吃”の動作主体であるが、“饭吃了”の“饭”は“吃”と言う動作の対象である。“我去过”は“我”が動作主体であるが、“北京去过”の“北京”は動作の目的地である。また次の例からも明らかのように、中国語は同じ動詞や助動詞また形容詞が“不～不～”で結ばれていても、どのような意味を持った語とどのような意味を持った語が結び付くかによって、意味関係はもとより、文法的な関係までもが異なってくる。

- |      |                    |
|------|--------------------|
| 不吃不喝 | 食べもしなければ飲みもしない     |
| 不学不会 | 学ばなければできない         |
| 不能不会 | できないではすまされない       |
| 不会不能 | できないはずはない          |
| 不大不小 | 大きくもなく小さくもない       |
| 不大不好 | あまり悪くない／大きくなければだめだ |

日本語には日本語の論理があり、中国語には中国語の論理がある。中国語は語順という枠組みが先ずあって、その中でどのような意味を持った単位とどのような意味を持った単位が結び付くかによって、両者間の意味関係や文法関係が決まってくる。中国語の論理は、二音節語にしる、連語にしる、複文にしる、音声の結合の中に宿されていると言ってよい。中国語において、文読解に音読が果たす役割は、語義や文法に比しても、決して無視できないものがあると言えよう。

3・3 言語は我々人間が生み出したものである。言語の最も原始的な擬声語や擬態語を見ても、単語がそれぞれの言語間において1対1で対応していないことを見ても解るように、言語は我々が生存生活しているこの

世界をどう見ているか、その世界観の表れとしてある。だから語彙が文化の反映であるとするならば、文法もまたその民族の思惟法の現われと見なさなくてはなるまい。単数と複数の別のある言語とない言語、時制のある言語とない言語、文法関係が形態によって表される言語と語順によって表される言語。いずれも思惟法の現われと見なせよう。だから同じ言語場面において、同じある事柄を相手に伝えようとする場合、言語によって表現の仕方が違うのは、むしろ当然である。とすれば言語の機能は単に伝達とするのではなく、我々自身が生産運用するというもっと主体性を持った観点より、表現（表現伝達）とすべきであろう。ある具体的な場面で外国語を運用する場合、単語も文法も発音も間違っていないのに、ネイティブスピーカーに通じなかったり、誤解されたりする原因はここにある。翻訳は技術的なものである、などと言えるほどに言語は単純なものでは決していないのである。

文の意味は、単語の持つ語義と、単語を組み立てて文を作る法則である文法によって表される。ところが中国語は、語義と文法だけでは、意味がはっきりと限定されない場合が多い。それは一つには上述のように、どのような意味を持った語とどのような意味を持った語が結び付いているか、という点と、今一つは、一つの文でありながら複数の意味、つまり岐義（意味分岐）が生じることからも解るように、文脈が語義や文法と同じレベルで文意に関っているからである。

このような特徴を持つ中国語を習得するためには、語彙の習得や文法の習得だけでは不十分であることは明白であろう。ある文を正しく理解した後で、その文を繰り返し音読をし、勘を養っておくことが大切である。筆者が教壇に立って以来、機会あるごとに強調している点である。中国語の学習にとって発音練習とは決して発音練習に止まるものではない。それは連語や複文の意味関係にまで発展する問題であり、語彙習得や文法習得と同じレベルの問題、否、それ以上に、入門時の基礎練習であると同時に、文の意味を理解した後で行う最後の仕上げとなる学習でもある。それは発

音を通じて中国語の論理を感知することにつながるからである。

4・0 次に『山中与幽人对酌』を見てみよう。

兩人対酌山花開 兩人 対酌し 山花開く  
一杯一杯復一杯 一杯 一杯 復一杯  
我醉欲眠卿且去 我酔たり眠らんと欲す 卿且く去れ  
明朝有意抱琴来 明朝意有らば琴を抱いて来たれ

【通釈】二人はさし向かいで酒を飲み、山の花が開いておる。一杯、一杯、また一杯。わたしは酔ってねむくなってきた。あんた、まあ行くのなら行け。あす朝来る気があれば琴をさげて来いよ。(前野直彬編『唐詩鑑賞辞典』東京堂出版)

“幽人”とは「世を避けてひっそりと暮らす人、隠遁者」のことであるから、これは李白の方から山中に居る幽人を訪ねて行ったのであろう。とすれば後半の二句はなんとも人を食った話ではないか。いくら陶淵明の故事をふまえているとはいえ、ここは相手の庵であって自分の家ではない。陶淵明が自宅で客と盃を交わしたのとは立場が逆である。これはどう解したらよいだろうか。その謎を解くカギが一句の“山花開”にある。

諸家によれば、一句目の意味は、二人で酒を飲んでしていると「傍らで山の花が咲いている」とある。しかし二句目への繋がりからしても、詩全体からしても、それではどうもしっくりしない。文字通り「山の花が咲いている」ととれば、この三字はどことなく浮いてしまうのである。“山花開”とは本詩の中でどういう意味があるのか。単に叙景ととる限り、どこかとして付けたかのようで、筆者にはその意味を見出すことができないのである。

4・1 二句の眼目は飲む酒の多さだけではない。さしつさされつ間断なく飲み続ける時間の長さ、および勢いである。“一杯一杯復一杯”の言いかからすれば、のんびりと景色を愛でながらそれぞれマイペースで飲ん

でいるのではない。さあ、さあ、と互いに勧め合っているのである。つまり二人はウマが合って話がはずんでいるのだ。酒好き、人好き、話好きの李白は、恐らく相当しゃべりまくっているのであろう。“山花開”とは、二人の話がはずんで話に花が咲いている比喩であった。二人で顔を合わせ酒を飲み始めると———見知己の如し———すぐに意気投合したのである。それでこそ“兩人”を詩の冒頭に主語として導入したのも、“兩人对酌”としていきなり酒を酌み交わす場面を設定したのも、“兩人对酌”を確定の条件句として、結果を“山花開”と表現したのもよく解る。両者は偶然な並列関係なのではない。明白なる因果関係であった。一句目は二人の出会いの様子を単刀直入に表現したものである。二人は初対面で盃を合わせるやたちまち意気投合。盃を重ねながら話がはずみ、話がはずむほどに盃を重ねる。すでに起句において絶えず盃を重ねる情景は暗に描写されており、承句がそれを受けることによって、盛り上がっている様子をいっそうはっきりと出したのである。中国語の名詞は複数概念であるから、花は一輪ではない。賑やかに咲いている。それを話が弾んでいるのに引っ掛けて表現したのである。

それだけではない。李白が幽人を訪ねたのは山中であるから昼間であろう。日暮れ前の夕方などではない。そしてひとたび顔を合わせるや話に夢中になって、日が暮れるのも夜がふけるのも忘れてしまった。かなり長時間話こんでいるのである。しかしその長い時間がアツと言う間に流れ去った。その感じを出すことによって、如何に我を忘れて話に熱中していたかを言い表している。

“山花開”を単に叙景ととるか、そこに“借景叙情”（叙景を借りて心情を述べる）を見てとるかによって、解釈上大きな違いが出てくるのである。このような状況をふまえて、もう一度後半の二句を考えれば、そこには自ずと従来とは違った解釈が生れてこよう。

4・2 二人が酒を酌み交わしている所は幽人の庵である。李白は客であって主人ではない。にも拘わらず、客の李白が主人たる幽人に向かって

帰れとはどういうことか。ここには接客に関する中国的発想、価値観が表れている。現代中国ではもてなしてくれた主人に対する謝辞として“在你家像在自己家一样”という言い方がある。これは主人のもてなし方が自分の意に合っているので、全く気を遣うことなく自分の家にいるのと変わらず愉快地に過ごさせて戴いた、と言う主人に対する最大の謝辞である。客がこう言えば、主人は必ず満面に微笑みを浮かべて喜んでくれる。もちろん本当に親しい者同士ではこのような言い方はしない。あくまで主人——客という関係において親しみを表す表現として用いられるのである。それではこのような言い方、発想が唐代すでにあったのだろうか。それは恐らく存在していたと思われる。先に見た『客中作』の後半の二句“但使主人能醉客，不知何処是他郷”がそれを物語っている。

ここまでくれば李白の真意は自ずと見えてくるであろう。つまり自分が客でありながら、主人とは我を忘れて話し込むほどに打ち解け、いつのまにか自分が客であることをすっかり忘れてしまって、つい自分の家にいるものと錯覚してしまった、と言いたいのである。『客中作』同様、表現をひとひねりすることによって、自分の気持ちをより印象強く、親しみを持って相手に伝える手法である。

このように見れば、今まで全く等閑に付されていた“琴”の役割も、その手がかりがつかめてくるであろう。

4・3 この琴が本詩においてどういう意味があるのか、私たち素人なら誰しも真つ先に疑問に思うであろう。突拍子もなく出てくる“琴”は、“山花開”とは違って、中国古典文学の基礎知識のない素人には、詩文だけからは何とも想像がつかないのである。ところが管見の及ぶところ、琴について言及した注釈書は皆無と言ってよい。当時の琴は小型で持ち運びができた、というのでは説明にならないし、陶淵明の故事を踏まえていると言っても、それが本詩においてどのような意味があるのか、説明がなければ我々素人には解らない。李白が酒を酌んでいる相手は陶淵明であった<sup>6)</sup>、といったところで益々意味不明に陥るばかりである。諸家が引き合い

に出している『宋書隱逸伝』を見てみよう。

淵明不解音律而蓄無絃琴一張，每醉適輒撫弄以寄其意。貴賤造之者，有酒輒設。淵明若先醉便語客，我醉欲眠卿可去。其真率如此。

淵明は音律を解せず、而れども無絃琴一張を蓄え、酔うて適する毎に、輒ち撫弄して以て其の意を寄す。貴賤の之に造れる者には、酒有れば輒ち設く。淵明若し先に酔えば便ち客に語ぐ、我れ酔うて眠らんと欲す、卿去る可し。其の真率なること此の如し。

李白は文中の“我醉欲眠卿可去”を一字変えるだけで、そのまま使っている。陶淵明を意識しているのは間違いないであろう。これによれば、陶淵明は音楽は解しなかったが、絃のない琴を持っていて、お酒を飲んで気分がよくなれば琴をさすって自分の気持ちを表したとある。つまり李白は、幽人と酒を酌み交わす楽しさを陶淵明の琴に託したのである。が、李白の真意はそれに止まるものではない。単純ではない詩句の表現がそれを暗示している。

李白は転句において主客を転倒させた。そして結句において更にひとひねり加えて、気分が高じて琴を弾きたくなつたのを、主人の自分ではなく、客である幽人とした。自分だけが一方通行で楽しくしているのではない。幽人も自分と話すことに楽しさを感じているので、李白はそれを見てこの上もなく喜んでいたのである。結句は条件句仕立てになっているが、実際の気持ちはそうではない。明日また飲み直そう、とお互いに言い合っているのだ。陶淵明は“可去”として、さっぱりとその場限りとしたのに対し、李白は“且去”と言い換え、含みのある言い方にしている。自分が寝ている間だけちょっと、と言うわけである。それは幽人とて同じであろう。なんとも微笑ましいではないか。二人は一体と言えるほどに意気投合している。二重にひねると言う手の込んだ技巧を用いながら、ひねることによって二人を一心同体の関係とし、親しさ、気安さを出し、愛嬌すらうかがえ

るほどに仕上げた李白。詩は生き生きと輝いて、いかにも詩仙の名にふさわしい出来映えである。

4・4 もう一步突っ込んで考えてみよう。陶淵明はなぜ絃のない琴を持っていたのだろうか。韻律を解しなかったからというのは理由にならない。それだけなら絃の有無などは問題にならぬ。第一琴など持っていないともよい。ここは琴でありながら絃のないことに意味がなくてはならない。

琴は中国文人のたしなみ。だから絃があればふつうの教養人となら変わる場所がない。それで陶淵明は絃を切ることによって、却って琴の持つ意味を強く出したのである。とすれば、考えられるのは唯一つ。伯牙である。陶淵明は、伯牙の故事を念頭におきつつ、絃を切ることによって、自分には知音がないことを表明したのだ。しかし世間と交際を絶ったのではない。貴賤を問わなかったとは、身分に関係なく人柄を中心に付き合ったのであろう。だからそれなりの人が来れば、琴を擦りながら楽しく酒を飲み、愉快に語らったのである。

つまり李白は、知音を得た、と言っているのだ。“明朝有意抱琴来”と、相手の庵に居ながら、当の相手に対して理不尽とも言える言い方をした真意はここにある。しかも相手が来るのを待つ、という表現をとりながら、実際には自分の方から相手の懐に飛び込んでいる。相手が去ると否に関係なく（実際山中で夜がふければどこにも行く所はない。李白と幽人とは同じ部屋でごろ寝したのであろう）その場でごろんとなって、夜具もつけずに寝入ってしまう李白の姿が髣髴とするではないか。ついでながら、“明朝”は「明朝」ではなく、単に「明日」という意味である。

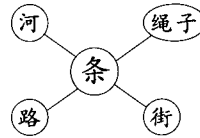
これまでさして重要とも思われていなかった“山花開”一つで、内容全体にこれだけの違いが生じるとすれば、単に文字面の意味だけではなく、音声の流れからくるイメージが如何に重要であるか、それはいくら強調しても強調し過ぎることはない。“山花開”を文字通り叙景ととれば、後半の二句は、そこに込められている李白の真意に到達することはできないであろう。それでは中国語において、音声と意味とはどのような関係にある



のだろうか。

5・0 一音節一形態素の中国語は、擬態語的要素が強く、ある音声（音節）があるイメージを持つ。そのイメージは抽象的であるが、他の形態素や語と結び付くことによって具体的な意味が引き出される時には、用いられる場面に無限の広がりが出てくる。中国語の特徴のひとつに挙げられる量詞から見てみよう。

量詞は名詞の形状によって選ばれる。“座”は山やビル、都市など、どっしりとして大きなものに用いられる。また“条”は川、道、縄など細長いものに用いられる。図式化しておこう。



“zuò”と聞けば、何か大きくてどっしりとしたイメージを思い浮かべる。そして名詞を聞くことによって具体的な形状を思い浮かべるのである。“tiáo”も同様である。だから同じ名詞でも、その形状によって量詞が使い分けられる。

- 一块肉（かたまり状になった肉）
- 一片肉（薄く切った肉）
- 一扇门（ふつうのドア）
- 一座门（城門のような大きな門）

つまり量詞は決して名詞と1対1の対応関係にあるのではなく、同じ名詞でもそれぞれの形をした個々の固体と結びつくのである。つまり量詞が名詞を選ぶのは、名詞の機能面に焦点を当てて用いられるのではなく、その形状に合わせて結び付くのである。

5・1 次に動詞を見よう。日本語では「服を着る」「ズボンをはく」のように、衣服を身に着けるのに上半身と下半身を区別する。中国語では、靴や靴下を含めていずれも“穿”である。“穿”にはこの外、辞典に「穴をあける、(場所を) 通り抜ける、(ひもなどで) つなぐ」等の意味が記載されているが、ひもでつなぐのは、結んでつなぐのではなく、五円玉や数珠のように穴の中にひもを通してつなぐ意である。つまり上着は腕を袖に通すから“穿”であり、ズボンは足を通すから“穿”を用いる。“chuan”という音声は「周囲を囲まれたようなところを突き進む」イメージを表す。だからそれは穴に限らず、両側を建物で囲まれた通り、また人込みの中でもよいし、プラットホームを汽車が通り過ぎるのにも用いられる。単なる道やレールの上を走るだけであれば“走”もしくは“跑”である。

中国人は動作動詞でさえも一種のイメージとして抽象的に捉えていると言えよう。中国語の動詞が文法的に形容詞と共通点が多いのもここら辺に原因があるのではないだろうか。

5・2 中国語は音声が語義としてではなく、まずイメージとして抽象義があり、それが他の形態素や語と結び付くことによって語義として具体化、顕現化する。形態素と形態素は、少しでも抽象義に意味的な関連があれば、かなり幅広く自由に結び付いて具体的な語義を持った単語を形成する。まじり気のない意を表す“清”を例にとろう。

“清”が名詞を修飾するものに“清水”“清汤”“清晨”“清夜”があるが“清心”は語全体が形容詞であり、“清道”は動賓連語で“清”は動詞である。形容詞を修飾するものに“清静”“清新”“清貧”“清苦”があるが、“清冷”と形態素の結び付きを逆にした“冷清”とでは意味が違ふ。動詞を修飾するものには“清算”“清还”“清除”“清查”“清蒸”がある。いずれも「まじりけのない」意から発展して“清”と結び付く形態素の持つ意味と照応して「すんだ、しずかな、すがすがしい、なにもない、すっきり」等の意味が引き出されている。およそ結び付きそうにない形態素と結び付いている“清闲”や“清福”などを持ち出すまでもなく、“清”の

活動範囲は極めて広く、驚くべき造語力と言わねばならない。

造語力は音節数が少ないことも要件となる。その点中国語は、形態素が一音節であるのに加えて、単語が二音節に収まろうとする傾向が強いから、最低数の形態素を組み合わせることで数多くの語彙を生産していることになる。これも形態変化がないので品詞に関係なく形態素と形態素が結び付きやすいのと、一音節一形態素で二つの形態素の抽象的意味が呼応し、具体的な意味が形成されるという点が大いに関係していよう。

“秋高气爽”は秋に空がよく晴れて天が高くなり気候が爽やかになると言う意味の成句であるが、二つの主述連語“秋高”“气爽”のうち“气爽”は意味が明確であるが“秋高”はそのままでは意味不明である。これは“气爽”との関連で「秋は天が高い」の意味が引き出されるのである。

このように辞典に収録されているものだけでも枚挙に暇がないほどであるが、中国文に接している時に、中中辞典はもちろん、中日辞典にさえ記載されていない語<sup>7)</sup>にしばしば出会うのは、我々の常に経験するところである。中国語の造語力が如何に活発であるか、推して知るべしと言えよう。

5・3 中国語が、言語という単位において、比較的自由に有意味な単位が結び付いたり、お互いに結び付いた形態素との関連で、内面に潜在的にある意味が引き出されてくるという性格を持っていれば、そのような言語を生み出して運用している中国人が、個々の言語場面において、その場にふさわしい形容や比喩をかなり自由に即興的に創って表現するのは何ら不思議ではないのかも知れない。語彙は文化の反映であり、文法は思惟法の現われである。そのような造語法自体が中国人的民族性の現われであるとするれば、その場その場の状況に応じてパッと比喩表現が出て来るのは、豊かで多彩な言語表現に長けている中国人の才能が与っているのはもちろんであるが、その背後にこのような自由で活発な造語法を生み出した中国人の思惟法があることも見逃してはならないだろう。従って、単語の意味を考える場合、学生にそのイメージとしての抽象義・基本義を教えたり考えさせたりするのは、中国語の本質に関わる点でもあるので教育上非常に

有益である。初期の段階において、発音の難しさを強調して学習者にプレッシャーをかけるよりも、このような音声の持つ積極的、建設的な面を取り挙げて、発音練習の重要性を説明するのが実益性が高く、その分効果も期待されよう。ある音声に対してその抽象的、基本的なイメージを身に付けければ、具体的な個々の場面に当てはめてそのイメージを広げることができ、中国語の表現において応用力がつく。意味は音声に宿っていることを思えば当然であるが、特に一音節一形態素という特徴を持つ中国語にとって、発音練習は決して正しい発音を身に付けるだけのためではないのである。

6・0 中国語の最も基本的な特徴は次の三点である。

1. 子音連続がなく、音節構造はCVである
2. 一音節一形態素である
3. 単語に形態変化がなく、文法関係は語順で表される

これは一次的特徴とも言うべきもので、声調など他の特徴はすべてこの三点が絡まって派生したものと言ってよい。母音も少なく子音連続がなければ、それだけ音節数も少なくなる。少ない音節がそれぞれにみな意味を持つとすれば、意味の混乱をもたらす同音語を防ぐために多音節語が多くなる<sup>8)</sup>。音節単位の意味が単語より一つ下の単位である形態素であれば、その意味が抽象化し、擬態語化するのは当然であろう。そして形態変化がなく、形態素と形態素、単語と単語が意味的に関連がありさえすれば、比較的幅広く結び付くのもまた中国語の特徴と言えよう。

中国語は、意味を表す最も基本的な単位である形態素が抽象義、イメージを表すため、そのイメージが当てはまる場合にはどこにでも用いられるという融通性が強い。そして語義としてではなく、イメージの重ね合わせとして言葉が用いられるために共通性思考が強い。つまり二つの事柄を比較する場合、両者の違いを指摘するのではなく、双方の共通点に眼を向け両者を結び付けるという思考形態もしくは価値観である。中国語の比喻表現もこのような思考形態の延長線上で捉えるべきではないだろうか。古代

より借景叙情の手法が発達しているのも同様であろう。中国人の発話の背後には、その言葉によって表されている意味以外に話者の真意が宿されており、発話の背景によっては、多かれ少なかれ政治的な意味が隠されていることが珍しくないのも、このような言語的特徴と無関係ではないであろう。“山花開”のように、一見自然な表現でありながらどことなく引っかかりを感じる場合は、その背後に何か別の意図があると見て先ず間違いないと言ってよい。さりげない表現の中に如何に不自然さを感知するか。繰り返し音読をして、音声の流れからキャッチする以外にないであろう。漢文読みは日本語の論理であるから、中国語としての音声の流れをなぞることには限界があると思われる。

6・1 日本語には日本語の感覚があり、中国語には中国語の感覚がある。それは先ず、具体的にモノを表す名詞においてそうである。例として「クマ(熊)」と“xióng(熊)”とを見よう。「クマ」は日本人にとっては大きくて恐ろしい動物である。ところが中国人にとっては“xióng(熊)”は無能で意気地ない動物である。だから文革期にアメリカを帝国主義であると批判し、“紙老虎”(張子の虎)と揶揄していたのと並行し、ソ連を修正主義であると批判し、“北方的白熊”(北方の白熊)であると表現していたのである。つまり図体だけは大きい、何もできない無能の輩というわけである。

また「ごちゃごちゃとして混乱状態」の様子を“一鍋粥”(鍋の中の粥)と比喻するように、中国語ではあるモノのある特徴に焦点を当てて、それを比喻として言語表現するのが殊の外発達している。ここにも擬態的な特徴が生かされている。だから、話に興じている二人の様子を、山に賑やかにたくさん咲いている花に喩え、“山花開”と表現することは、比喻として何ら奇異でもなければ不自然でもない。ひょっとすると、実際には山には花など咲いていなかった可能性すらあるのである。

このように、中国語をその言葉の持つ意味でそのまま日本語に訳すことが可能な単語や表現であっても、音声の表すイメージには大きな開きがあ

る。単語の持つイメージと文の表す正しい意味をキャッチできるように中国語の感覚を磨くには、音読を繰り返す学習しかないであろう。読解力養成の為の学習方法として、語彙力と文法知識に並行して音読を重視する所以である。

6・2 以上見てきたように、形態素の持つイメージ——基本義と意味の広がり、擬態語的性格からくる表現対象の類似的広がり、比喻表現の臨機応変な用い方と豊富さ、および音声の流れによる中国語の論理を習得するには、発音練習、音読練習が非常に重要で有効である。読解力の養成に、単語の語義と文法理解に加えて発音練習を重視する所以である。中国語は、発音よければ半ばよし<sup>9)</sup>というのは、中国語の発音の難しさを言ったものであり、発音技術として音声の正確さを求めたものである。本稿の求めるものは単に発音の正確さに止まるものではない。一歩進めて、読解力の向上に発展する発音練習の位置付けと意義である。発音練習、音読練習こそ中国語学習の仕上げとして必要不可欠な学習方法であると言えるであろう。

中国語の発音は実際難しい。そして一音節一音節にイメージが宿っており、音声の流れの中に言葉の意味だけでなく、話者の真意が込められているとすれば、中国語の学習は、発音に始まり発音に終ると言っても、決して過言ではないであろう。中国語教育においては、入門期に発音教育に重点が置かれるが、筆者が上級に進んでも音読を重視しているその理由が、本稿において少しでも明らかになっているとすれば、筆者の目的は達せられたことになる。

注)

1. 齊京則宣行『読解入試漢文』32頁2004年、旺文社
2. 輿水優『中国語語法の話』9頁、昭和60年、光生館
3. 香坂順一『白話語彙の研究』156頁、昭和58年、光生館

これによれば“但”は単独でも仮説連詞の用法があるとして、水滸伝より5例挙げてあるが、そのうちの3例は、後文に条件を受ける“便”が用いてあるし、他の2例は前文に“有”が用いてある文である（1例は“有”と“便”が併用されて

いる)。“有”は次の例文で見ると、ごくふつうに条件文を形成する。

有时间来玩儿。 時間があれば遊びにいらっしやい。

有话只管说。 話があれば遠慮なく言いなさい。

有机会我想去中国。 機会があれば中国に行きたい。

従って、それらの例文を根拠に、“但”が条件文を形成すると見なすことはできない。

4. 大河内康則「複句における分句の接続関係」『中国語の諸相』94頁, 1997年, 白帝社

氏は、複文を時点の違いと順接、逆接の関係から、次のように分類しておられる。

	Ⅱ		
Ⅰ		已然表現	未然表現
順接関係		因果句	条件句
逆接関係		転折句	譲歩句

5. 大河内康則 上掲論文 89頁

例えば、条件関係の複句で、それが条件関係であると解されている理由として上げられている“要…要…” “没有…没有…” “不…不…” “少…少…” “一…一…”などは、それらがあるからといって、一義的に条件関係が導きだせるものではない、との指摘がなされている。

6. 一海知義『陶淵明』—虚構の詩人— 4頁 1997年, 岩波書店  
 7. 日本で出版されている中国語辞典には単語もしくは連語として収録されているものでも、中国では連語として扱い、辞典に収録されていないものが多い。  
 8. 秦耕司「音節構造・形態素・文字」『長崎県立国際経済大学論集』第23巻, 第2号, 1989年  
 9. 相原茂『中国語の学び方』1999年, 東方書店